

平成30年度 自己評価・学校関係者評価 報告書 (No. 1)

岐阜県立飛騨古城特別支援学校

学校番号

120

自己評価

学校教育目標	「地域で育ち、学び、共に生きる」 ・児童・生徒が、生まれ育った地域で、いろいろな人たちと共に生活をしていくために、一人一人の障がいの状況や能力に応じて、個々のもてる力を高める。
--------	---

評価する領域・分野	「教育活動・学習活動」「学校経営」
現状及びアンケートの結果分析等	・「体罰の防止に努めている」と「いじめや差別を許さず、厳しく対応している」の2つ以外は肯定的回答が80%を超えていた。その2つは「わからない」の回答が20%を超えていた。これらから当校の教育活動に対して全体的には概ね妥当と受け止めていただいているといえる。 ・ただし、複数の否定的な回答があった質問項目があったことから、一人一人のニーズに応じていくことには不十分であったといえる。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	・一人一人の教育的ニーズに応じて、個々の可能性を最大限に発揮できる教育的支援をする。 ・地域の教育的資源を活用した体験的な学習を実施する。 ・安心して学校生活を楽しむことができる状況づくりを進め、児童生徒一人一人の自己表現を促す。 ・一人一人が自己実現に向けて、能力や特性に応じた主体的な進路選択、進路決定ができる環境を作る。
重点目標を達成するための校内組織体制	・主事会及び企画委員会、各分掌会、各学部会 ・全校研究会及び研究グループ ・職員研修会
目標の達成に必要な具体的取組	・主題研究『児童生徒一人一人が「わかった」「できた」と思える授業づくり』の校内研究の実施 ・生徒理解や支援、授業力向上を目的とした職員研修会の実施 ・個別の教育支援計画をもとに支援に関する共通理解を図る学部支援会議の実施 ・小学部段階から働く体験を行い、働くことに対する意欲や態度の育成
達成度の判断・判定基準あるいは指標	・学校生活全般における児童生徒目標の達成状況 ・取組実施状況及び実施後の反省評価
取組状況・実践内容等	・児童生徒一人一人について、自立活動の6区分から実態を整理し、その実態把握に基づいて、学習の目標設定や学習内容、方法について検討した。 ・全員が授業を提供し、授業検討シートをもとに一人一人が「わかった」「できた」と思えるような授業であったか検討し、授業改善を行った。 ・学部支援会議を実施し、一人一人の児童生徒の実態把握や目標、支援等について皆で検討し共有した。また、必要に応じて、関係者による校内ケース会議や関係機関と連携して対応支援を行った。

評価の視点	評価
①主題研究等を通じて授業改善することができたか。	A (B) C D
②一人一人の障がいの状況に応じて、もてる力を発揮するための支援ができたか。	A (B) C D
③一人一人が充実した学校生活を送ることができたか。	A (B) C D

成果・課題	総合評価
<p>○主題研究を通じて、自立活動の6区分から一人一人の実態を整理し、目標を導き出して授業を実践することで、児童生徒が「わかった」「できた」と思える主体的な学びが一定程度進んだ。</p> <p>○個々の児童生徒の対応や支援について、学級担任が抱え込まず、関係者が集まり相談し、連携して実施することができた。</p> <p>▲実態把握から目標を設定して授業を実施したが、一人一人に合った教材教具を用いることや、様々な生活場面に汎化したり様々な学習活動に広げてたりすることが必要である。</p>	<p>A (B) C D</p>
<p>来年度に向けての改善方策案</p>	<p>・一人一人が「わかった」「できた」と思えるよう、実態と目標に応じた教材教具を開発や改善をする。また、それらの教材教具は教材ライブラリーとして整理し、活用できるようにする。</p> <p>・</p>

学校関係者評価 (平成30年11月27日実施)

<p>意見・要望・評価等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ひだまり祭(学校祭)を参観し、児童生徒一人一人に応じた役割があり、発達段階に応じて一人一人が活躍していた。</li> <li>・学校評価について、全体的に良い結果だと思うが、これに満足することなく頑張ってもらいたい。否定的な意見に対しては、個々にもっとコミュニケーションが取れるといい。</li> </ul>
---